

## 出産は私たち自身が問われた試金石

早坂温

### なぜ会津に移ってきたか

今年はどうもカラ梅雨だと思っていたら、7月も半ばを過ぎると今度は1週間以上も続く雨。その締めくくりには「らい様」を伴った、丸2日間のどしゃ降りでした。それまで順調だった、この村特産のカラムシ畑も大雨の直撃をくらい、多くは収穫を目の前にして倒れてしまいました。いつもながらの梅雨の終わりの通過儀礼ですが、今年のそれは例年になく田畑に大きな爪痕を残して行きました。わが家の場合、カラムシは何とか無事でしたが、出荷用の野菜の一部は土砂によって洗われました。転作田の畑はくるぶしを超える水が溜まり、キャベツやブロッコリーなどは全滅です。いつもながらのことですが、ままたまらないものです。

私たちがこの会津の地に移り住んだのはここがカラムシという植物を栽培し、その繊維を取り出して糸を紡いでいる本州唯一の地だからでした。約700年間、連綿と伝えられて来たカラムシですが、今は後継者もほとんどなく、放っておけば数年後には消滅しかねないという際迫った状況です。伝統工芸と呼ばれるもののほとんどが、こうした問題に直面していると思います。経済効率を優先する現在、面倒な手仕事は、その苦勞の割には報われない仕事になってしまったようです。こうしたことは、なにも伝統工芸に限らず、この数十年の中で色々な方面に出てきているように思われます。

合理化、近代化という名や、科学、技術という名のもとで、多くの物が切り捨てられ忘れ去られて来ました。けれども、そうしたもののなかに何か大切なものがあるのではないかということも、遅まきながら気付き始めた時代になって来たような気がします。

私たちが都会を離れ、この村に来たのもそうした流れの一つなのかもしれません。カラムシも、時代の要求から、一時期は大量生産を目指し、化学肥料を使って栽培したこともありました。しかし、肝心の繊維の質が悪くなり、カラムシならではの光沢も消えてしまったようです。天然繊維の中では最も強靱といわれるカラムシです。その特長がなくなるとは何にもなりません。こうして好むと好まざるとにかかわらず、カラムシはまた昔ながらのやり方に戻らざるを得なくなりました。カラムシや野菜を栽培しながら生き方を学んできた私たちにとって、出産ということは、この生活を選び、そして丸5年間そこで生きてきた自分たち自身が問われている、試金石のようなものでした。

どれだけ真摯に命と向きあえるか自分たちが、どれだけ真摯に命と向きあえるか、このことを第一に考えたとき、冬の間、大きな総合病院のある隣町にアパートを借りるという決断は、それほど大変なことではありませんでした。隣町とはいえ1,000m級の峠越えで、もちろん冬季の交通は閉鎖されてしまいます。いざという時の道の確保はかなり難しい。ただ、のちに母親学級に参加して知ったことですが、その病院では夫の立ち会い出産を認めてはいませんでした。

いろいろな理由があるのですが、そもそも夫がともに出産に関わるのを、頭から「認める、認めない」と、どうしてそんなことが言えるのかが不思議でした。一体何が一番大切なのかの根本が、私たちとまるっきり違うことは、その病院での主治医の対応でもはっきりと感じられたことでした。

私たちは、私たちの出産を共に考え、共に臨んでくれる人を求めているのであって、出産をまるっきり人の手に委ねるつもりは毛頭ありませんでした。

同じ町内に中嶋助産院があったのは全くの偶然でした。お母様のあとをついだ助産婦の小林康乃先生は、思いのほか若々しく、とても素敵な女性でした。大切な部分をしっかりとらえ、堅苦しい枠には囚われていないので、自分に人を合わせるのではなく、人に自分を合わせるような柔軟さが感じられました。昨年、亡くなられたお母様が戦後間もなくこの地で助産院を始められたそう、娘さんの康乃先生は二代目にあたります。

初めて中嶋助産院に行ったときから、妻も私も、この先生にお世話になろうと思いました。私たちは、特に多くの要望を口にした訳ではないのですが、月に1回の受診日には、先生は、あれこれと本やビデオを貸して下さいました。多分、出産をするのはあなたたち自身ですよ、

自分たちが主体となって、自分たちのお産をしましょう、ということだったのだと思います。7、8か月を過ぎた頃、康乃先生に、「自宅出産をしてみませんか」と打診されました。夫である私のほうは、それも良いだろう、とすぐに思いましたが、産む当事者である妻のほうは、やはり即答はできなかつたようです。

康乃先生が、なぜ自分たちに自宅出産を勧められたのかは分かりませんが、近頃は中嶋助産院でも、全て入院出産だそうです。久しぶりにアットホームな自宅出産をやりたいかたのかもしれないし、けれども、こればかりは産む当事者の問題ですし、相手によりけりで、気軽に持ち掛けられる話ではありません。どこか波長が合ったということなのでしょう、私たちに白羽の矢が立ったというわけです。

結果として自宅出産を決意したことは、より自発的に自分たちでお産に取り組むということにもなりました。何しろ、いざという時、もし康乃先生が不在という事態になったり、間に合わなかったら、自分たちがしっかりしていなくてはなりません。出産の舞台は他でもない、私たちの家です。何もかも人任せにはできないお膳立てが、否が応にも揃いました。自分たちの命を人任せにしないということ、とことん突き詰める良いきっかけでした。

## 自宅出産では夫が妻に信頼されていなければ

その頃から、いよいよ本格的に、呼吸法を含め本番を想定した具体的なシミュレーションを始めました。実際に出産するわけではない私にとっては、現実には全く必要のないことがほとんどでした。けれどもいざ本番のとき、出産の当事者である妻が混乱してしまうことは十分にあり得ます。

そんな時にサポートできるのは私しかいないのですから、なおざりにはできません。それに夫も本気で真剣にやっていて、しっかりと身に付いているということ、妻が信頼していなければ、何の意味も持ちません。単なるお付き合いで、いざという時の信頼感は決して生まれはしないでしょう。

結局それは、出産のための技術というよりも、いかに両者が信頼関係を持ってその時に臨めるかということ、地道な日常の積み重ねでもあったのだと思います。何冊も積み上げた参考文献の中から、必要なことをリストアップし、すぐ分かるように整理をしてノートに書き付けることもしました。

そして出産予定日のちょうど2週間前、冬の農閑期のアルバイト先であった、和太鼓の工房に暇をもらいました。予定日の前後2週間くらいならば、いつ生まれてもおかしくありません。今日お印があるか、明日あるだろうかと、期待半分、不安半分の日々が始まりました。必ず来るけれども、それがいつか分からず、ただ日々を過ごしていくということは、妻にとってみればかなりのストレスのようでした。

しかし、この程度のことは後から考えると、まだまだ序の口でした。本当の戦いは、予定日の翌日、朝9時、破水という少し厄介な事態から始まったのですが、4日半の戦いについては、前記の妻の手記のとおりです。

## 出産直後に康乃先生の立場をおもう

無事にわが子は誕生してくれましたが、本当に何事も、そう簡単に一筋縄では行かないものだと再認識しました。けれども、スムーズに行かないことのほうがかえって、そこから得られるもの、感じ取れるものがいかに大きいことか。そして、そんな切羽詰まった状態の中でこそ、まがい物でない本物の美しさと出会えるのだと思知らされました。103時間余り。これからの長い人生の中から見れば、ほんのひとこまに過ぎません。けれどもその中で、私たちは人として本当にかけ替えのない大切なものを、康乃先生から分けていただいたような気がします。4日半とひと口で言うのは簡単ですが、恐れを知らない私たち当人よりも、幾度となく修羅場を潜りぬけて来た康乃先生のほうが、どれほど陰で心を遣われ、長く感じられたことか。結局この間、都合15回以上もわが家へ足を運び、様子を診に来られることを強いてしまいました。来ていただければ、それだけでとても安心できたのですが、それにしても毎度毎度、申し訳ないような気持ちでした。

4日目の晩などは、夜11時頃ようやく帰宅されたと思いきや、「家にいても寝つかれないか

ら」と、午前2時頃、再びいらしていただき、明け方まで腰をさすって下さった。本当に言葉もありませんでした。促進剤を打ちたいのは山々なのに、最後まで「ここまで来たら、待ちましょう」と、温かく見守って下さいました。促進剤も使わず会陰切開もしなければ、それに越したことはありませんが、いかに手を尽くしても、そううまく行くとは限らないこともあります。

結局それも「形」であって、その「形」だけに囚われる必要はないと思います。産む一時の形云々よりも、「これから」のほうが遙かに長く大切なのですから。とは言え、こんなことが言えるのも、その「形」の前に、「心」がしっかりとあるからなのだと思います。前に康乃先生が、ふと「結果はどうあれ、お互いにみんなが誠意を尽くせば、それでいいんでないかな」というようなことをおっしゃっていました。本当にそのとおりでと思います。ですから、あそこまでやったのですから、あの時点で促進剤を使っても、あるいは病院に転送されても、それはそれで納得できたと思っています。

わが家の野菜作りの場合、できる限り自然に、作物の生命力を十分に発揮したものを作りたいと思っています。けれども自分なりに、どれだけ手を尽くしてもうまく行くとは限りません。うまく行かないことのほうが多いくらいです。やはり、自然は、人の行為を超えたところにあります。生易しいものではありません。

そして、もちろん誰に責任転嫁もできません。当たり前ですが、結果は自分で負うしかありません。生命や自然に向き合うということは、どんなことであれ、共通する厳しさをしっかりと見据えなければならぬのだと再認識させられました。けれども、それだからこそ、そこに至る過程が大切なのだと実感しました。

確かに破水して足掛け5日間というのは、「待つ時間」としては、決して短くはありません。こと「命」に関わることで、うわべや飾りでは繕いきれない人の本性がはっきりと出てしまう。

そんな中での、康乃先生の、迷いも含めた美しさは本物でした。そのお陰かどうか、不思議なことに最後まで不安とか焦りとかいうものはありませんでした。「長いなー」というボヤキは、正直、ありましたが。知らない者の強みというものもあるのでしょうか、今考えると、それだけでは何かを、その切羽詰まった中だからこそ敏感に感じていたような気がします。それはもしかしたら、いつおなかに耳を当てても、正確に力強く脈打っていた命の鼓動のせいかもしれません。

あるいは「生命」に対する康乃先生の絶対的な信頼感から来ていたのかもしれませんが。長い助産婦経験の中では、もちろん、厳しい事態にも幾度も会ったと思います。そうした厳しさを冷静に踏まえた上での、命に対する信頼感ほど、私たちを安心させてくれるものはありませんでした。

### 一つ一つのいのちに敬意をはらう

情報化の時代と言われ、様々な「最新情報」や、あるいは「当たり前」「常識」が錯綜する中で、命に対して一体何が「誠意を尽くす」ことなのか。本当に難しい。けれども、このほんのささやかな、しかしズッシリと重い経験の中から気づいたことがあります。結局それは、一人一人の生命に対し、どれだけ、かけがえのないものとして敬意を持ち、大切に取り扱い、向き合うかということにかかってくるだろうということです。それをどこまで、自分を誤魔化すことなく突き詰めて考えられるかという、当然だけれども、とても難しいことが否応なく試されたのだなということです。そして、そこで本当に問われているのは、何よりも「心」なのだ。

大変なお産体験でしたが、それゆえにこそ、心からそういった諸々全てのことに対して、感謝の念でいっぱいです。「多少」時間がかかったということを除けば、結果的には、おかげさまで本当に穏やかな、よい出産となりました。

私たちに与えられるべくして与えられた、私たちらしいお産だったと思います。

(はやさか・あつし)